# 道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

## ☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

日本一周したタレントのリサちゃん、世界を駆ける鉄人賀曽利さん（74歳）と♪

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

新緑のそよ風が爽やかな5月、きらきらと輝く高原川（奥飛騨）の川面を眺めながら、再び日本海へ向かいました。日本中から石川県の千里浜なぎさドライブウェイを目指してバイクが集まる「SSTR（サンライズ・サンセット・ツーリング・ラリー）」。コロナ禍で形を変えて運営されていましたが、10周年記念大会の今年は、5月21日～28日の9日間に9千台もの参加者が駆け抜けました。私が走った日は気持ちがよく夕陽もバッチリでしたが、どの日も千里浜ゴール時は天候に恵まれたようでした。春開催なので、前回の秋に比べると3時間半も時間に余裕があり、それぞれが距離を伸ばして道の駅や高速SA&PAのポイントを増やしたり、ゆっくり食べたり観光したりと満喫したようです。

そんな中、ようやく外でマスクを外せる雰囲気になったのに、なんと大ポカの私は出走2日前に自宅でつまずいて顔を強打してマスクが外せない身となりました。ち～ん。振り向きざまにカーペットの角に引っかかり、2メートル吹っ飛んで顔を石油ストーブにぶつけ、続けて頭で居間の壁に穴をあけるという大惨事。単なる老化とも言えますが、実はSSTR開催中は、我がカフェに立ち寄ってくれるライダーがわんさかやって来て、大騒ぎとなります。今年はランチ提供はせずに喫茶のみとしたのは大正解だったのですが、それでも小さな町の小さなカフェに土日に百台以上やってくると、てんやわんや。転んだ日も朝でテンパっていたのでしょう。幸い骨折はなし。血を洗い、マスクで傷を隠し、何事もなかったようにお店で笑顔の対応してましたが、相棒の夫は「またか」と呆れ顔。とにかく、動けるということは不幸中の幸いでした。頭打ったけれど、ヘルメットを被って千里浜に行けたし♪ただし、ステージでマスクつけているゲストは私のみでした。夏には外したいけれど、ある意味、マスクしてても怪しまれない時期でよかった？

そんなSSTR旋風の中、今年も本当に愉快な方々が次々とやって来てくださいました。81歳の現役ロングツーリスト、世界一周を何度もやっているオジさまコンビ、強者カブ女子軍団、初めて一緒に走る母と息子の親子組etc…。ほんどが帰路に寄ってくださる中、真っ最中のライダーも多かったです（工事や渋滞などもあるので、意外と時間に余裕なし）。ゼッケンをつけている同士はさらに共通点があるからでしょう、ずっと前からの知り合いのように楽しそうに会話しています。リターンして今回が初ロングツーリングだった方は、「こんなに他人とバイク話がいっぱいできたことが一番嬉しい！」と終始笑顔でした。仕事も年齢も性別もバイク歴もみ～んなバラバラ。バイクと旅が好きという共通点だけで、これだけ大切な何かを共有できるって、本当に凄いことだと思います。おそらく時間が限られている中でのエントリー。バイクや携帯電話などの故障やルートミスなど、途中で何かしらのアクシデントに遭った人は多いはず。今年は関東で大雨が多かったので、スタートして半分が土砂降りでしたという人も。何もなかった人など僅かでしょう。バイクに乗るということは、さまざまな経験を重ねていく中で「生きる」ことを学ぶこと。最短の2泊3日でも、宝のような経験をした人ばかりなので、カフェのパーキングに来たみんなの顔は、最高に輝いていました。

お金では買えぬ偶然と経験の数々。SSTRロスになった人が再び次の開催を待つ気持ちが解ります。初参加も常連さんも楽しめるこの大会、主催の冒険家・風間深志氏（71歳）は「この先も10年は続けます」と、名言。バイクというツールで日本を元気に活性化したいという彼の思いは、コロナ禍でも形を変えての〝開催実現〟に繋がりましたが、人数が増えても内容が薄まらず、地域の支持や応援がどんどん増えていくって素晴らしい。主役は参加者やボランティアなど関わったすべての人たち。3月号で紹介した中山ファミリーは、サイドカーに子供3人を乗せてサポートの親族一同と共に初挑戦で無事完走。同じく障がいのある息子さんと2度目の参加だった正田ファミリーも、仲間たちと涙のゴールをしました。いつかSSTRの映画ができたらいいなあと、ふと思いました。

この日に走った431台を迎えつつのトークイベント中。私だけマスクだっ！

長野市の加藤さんも感動した山梨の河井さん（81歳）、250CCで数百キロも楽々。

シルクロード始め世界を走り回った斎藤さんと土屋さんも「SSTR大感動したよ！」。

カブ軍団は、イラストレーターのよしえちゃん、オフ好きな宿屋の恵子さん、古民家改築中の直美さん。

オン・オフ・三輪・Rレプリカとなんでもござれ。初対面ですっかり意気投合！

## 九州の散歩道

# 日向に残る百済王の「足跡」

フリージャーナリスト　湯浅玲子

九州は大陸文化とのつながりが深い場所ですが、宮崎県には朝鮮半島の古代国家・百済から王族が亡命してきた伝説が残っています。今から約1300年前、朝鮮半島の百済王国が滅亡し、王族だった禎嘉（ていか）王の一行が日本に逃れてきます。2艘の船に乗った一行は、最初に安芸の国（広島）の宮島あたりにたどり着きますが、追っ手を恐れて筑紫（福岡）に引き返すことにします。その途中の日向灘で嵐にあって流され、2艘の船は別々の場所に漂着しました。

禎嘉王と次男の華智（かち）王が乗った船は日向の金ヶ浜に漂着。禎嘉王はすぐに向かうべき土地を占い、西方に良い土地があるということで向かった先が美郷町（みさとちょう）の神門（みかど）でした。現在この地には禎嘉王を祭る神門神社があります。

一方、禎嘉王の妻・之伎野（しぎの）妃と長男の福智（ふくち）王が乗った船は少し南の蛇口浜に漂着。福智王も占いを行い、向かった先が木城町（きじょうちょう）の比木（ひき）でした。ここには福智王を祭る比木神社があります。母の之伎野妃は浜の近くにそのまま滞在し、その場所は鳴野（しぎの）という地名となって残っています。また、付近の大年神社に之伎野妃が祭られています。

比木神社に祭られている福智王の御神体は毎年父と母に会いに行きます。1月に行われる「神門御神幸祭」では父が祭られる神門神社へ、11月に行われる「大年下り御神幸祭」では母が祭られる大年神社へ。比木神社から神門神社までは約90キロあり、昔は9泊10日かけて歩いて巡行していたそうです。市町村の境界を超えて御神体が神幸するのは全国的にもめずらしいといわれています。

地元の人々はこの百済王伝説を大切に語り継いでいて、朝鮮半島との交流などを目指す「百済の里づくり」が行われてきました。日韓交流のシンボルとして建てられた「百済の館」は、本場から技師を呼び寄せて造った本格的な韓国様式の建物。内部には百済の文化や百済王伝説についての展示があります。また地域の若者たちは韓国の伝統芸能「サムルノリ」を演奏し、主婦たちが作るキムチは地域の特産品となっています。

王族の遺品と伝わる24面の銅鏡の中には、奈良の正倉院の宝物と同一のもの、東大寺の大仏台座下から出土した鏡と同形のものなどが含まれています。のどかな日向の町村に伝わる貴重な文化財は、百済王伝説が単なる空想ではないことを示しているようです。

（写真提供：みやざき観光情報「旬ナビ」）

養老2（718）年創建と伝わる神門神社

百済の館でサムルノリを演奏する若者たち

## ハッと思いました

皆さんは「一時停止」をどの様に理解し行動していますか。

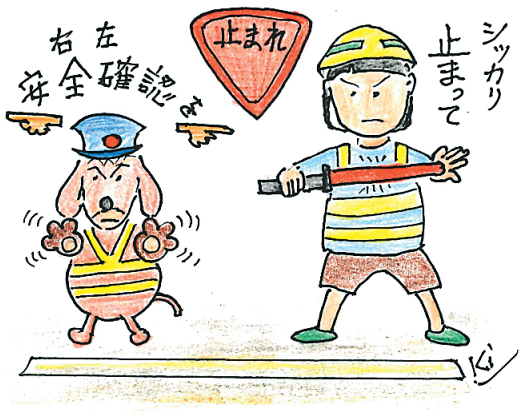
合流、交差点、踏み切りなど安全確保のために、一時停止して次の行動に移りましょうと言う事ですが、ここで勘違いしてはいけないのは、一時停止＝安全確認じゃないと言う事。停止した後に安全確認をした上で動き出して、一時停止による安全が確保された運転になるのです。（私はそう考えています）。自転車も歩行者も同じように心得るべきだとも思ってます。

自転車は軽車両扱いなのは皆さんご存知のはず。車道左通行が基本です。特例として高齢者、子供が通行してもよい歩道もありますが、あくまでも歩行者優先であり、自転車専用ではないのですけど、歩行者の間を速い速度ですり抜ける危険な運転が横行。歩行者も前も横も見ない「ながらスマホ歩き」と突然立ち止まる「スマホ地蔵」が多発。接触・追突などの事故も少なくありません。

交通ルールがあるにもかかわらず、街中は無法地帯になってます。

前を見て歩きましょう。前を見て両手でハンドルを握って自転車をこぎましょう。前を見てハンドル握ってアクセル、ブレーキを操作して車を動かしましょう。

誰もかれもが前を見ていないんじゃ・・事故になるのは当たり前。安全なんて生まれようがないです。

近頃思うんです。歩行者も歩きと言う交通手段を用いて、社会全体の交通を形成しているんだなと。ならば、歩行中の人にもドラレコならぬウォークレコがあってもいいんじゃない。むしろ必要じゃないのかってね。自分を守るため、万が一、被害に遭ったとき、泣き寝入りしないために。

マスクを着けるべきか、外すべきかの論争なんかAIに任せて、人が考えるべき事がたくさんあると思いますけど。